

(3) 仏文研究室への出入り

医学部へ進学したのちも、加藤は文学に対する情熱を失うことはなかった。文学に対する関心は主としてふたつの方向性があった。ひとつはフランス文学に対する関心が広がったことである。すでに中学校時代に芥川龍之介に傾倒していたことは述べたが、芥川を介してアナトール・フランスを知り、さらにフランス文学の森に分け入る。

もうひとつは日本文学史上のいくつかの歌集を読んだ。すでに『万葉集』は中学時代以来折に触れ読みつづけてきた。さらに藤原定家の『新古今和歌集』『拾遺愚草』、日記『明月記』、西行の『山家集』、『建礼門院右京太夫集』、そして源実朝の『金槐和歌集』を読んだ。なかでも藤原定家と源実朝を好んだ。

ことに定家の和歌は象徴詩といえるものであり、象徴詩に関心をもち、それはフランス文学にも影響を及ぼし、フランスの象徴詩人たち——ボードレー、マラルメ、ヴェルレーヌ、ヴァレリーに関心を寄せるのであった。同時にフランス文学を独学ではなく、きちんと学ぼうと考えたはずである。

父信一のかかりつけの患者に東京帝国大学文学部仏文学科の辰野隆がいたことはすでに述べたが、父信一は、加藤が仏文の講義を受けられるかを辰野に打診し、快諾を得た。こうして加藤は文学部仏文研究室に出入りするようになり、講義も受けたのである。

当時の仏文科はそうそうたる陣容を誇り、教授が辰野隆、助教授に渡辺一夫、鈴木信太郎、講師に中島健蔵、助手に森有正、学生には三宅嘉徳、福永武彦、中村真一郎がいた。また英文学の中野好夫や倫理学の吉満義彦も仏文研究室に顔を出していた。このすべての人たちと

の交友が始まったのである。



(写真：左から辰野隆、渡辺一夫、鈴木信太郎)

加藤が受講した科目には、辰野の「19世紀文芸思潮」、渡辺の「モリス・セーヴやモンテニユの講読」、鈴木「マラルメ研究」、中島の「『サロメ』講読」などがある。仏文以外では、吉満義彦の倫理学、神田盾夫の「ギリシア語講読」を受けた。神田は、加藤の大叔父の義兄高木八尺の実弟であり、遠縁に当たる。神田の言動は敢然と反戦を貫いていた。

この頃の加藤は、フランス文学関係の書物を読み漁った。主として第一次大戦後のフランスの作家たち、そして戦間期の《ユーロップ》や《N・R・F》を片端から読んだ、と自らいう。ほぼ鎖国状態にあるなかで、西洋に開いた小さな窓であったに違いない。

仏文研究室の雰囲気は、医学部のそれとは違った。何よりも自由であり、好戦的な言辞も、非戦的な言辞も許され、その言辞を咎められることはなく、他言されることは決してなかった。

諸先生のなかで加藤がもっとも親近感を抱いたのは、渡辺一夫である。渡辺の学問というよりも、むしろその生き方や諷刺の精神を大いに学んだといえる。渡辺は「六隅許六」

(マイクロソムのアナグラム)の名で、加藤の『1946 文学的考察』『ある晴れた日に』の装幀を手掛けるなど、渡辺の晩年まで続いた。

医学部以外の人たちとの交流は仏文研究室ではなかった。法学部の川島武宜とその弟子の立石芳枝との勉強会にも加藤は参加した。

戦時下に加藤と交流のあった人たちのなかで、戦争反対の意思をはっきりと表明したのは、渡辺と川島のふたりだった。渡辺について渡辺や川島が、「絶えず「狂気」を「狂気」とよび、「時代錯誤」を「時代錯誤」とよびつづけるということがなかったら、果して私が、ながいいきさの間を通して、とにかく正気を保ちつづけることができたかどうか、大いに疑わしい」と加藤は書き残した。渡辺や川島との少数者としての連帯意識をもって、戦時下の孤独を忍んだと思われる。